京都大学教育学部におけるメディア史研究の系譜

―開講科目についての覚え書き―

津金澤聰廣（関西学院大学名誉教授）

はじめに

メディア史研究が京大教育学部において、専任の教官によって担当されるようになったのは、佐藤卓己教授が国際日本文化研究センターから大学院教育学研究科准教授として就任された二〇〇四年以降のことである。

それ以前は学内外の非常勤講師によってメディア史研究に広く関連する諸科目が断続的に開講されてきた。私は、一九五三年四月に京大教育学部に入学し、教養課程を経て一九五五年四月から教育学部の専門課程の授業を受けた。その後二年間、大学院教育学研究科（修士課程）で学び中退したが、一九七〇年以降、当時の姫岡勤教授によって、加藤秀俊先生が担当されていた「広報学概論」という科目を引き継ぐよう委嘱された。結局、以後二十四年間「広報学概論」を担当させていただいた。小論はその関係で、私が知り得た範囲でやや不確かな資料―教育学部教務課にも開講科目の全体がわかる『教育学部要覧』が一九七五（昭和五〇）年度以前の分は保管されていないのが残念である―と記憶を頼りとした文字通りの覚え書きに過ぎないことを、先ずお断りしておきたい。（教育学部図書室にも『要覧』は保管されていないとの由である。現存の関連科目調査については、本号編集担当の木下浩一氏にご苦労を

おかけし、お世話になったことを記して感謝したい[1]。

一九五五・六年の概況

一九五五年には、アメリカ合衆国から帰国されたばかりの永井道雄助教授が人文科学研究所より着任された。後日、教育社会学部門の主任教授・重松俊明先生から伺った話では、メディア・コミュニケーション史関連科目開設案は、重松教授を中心に、当時の森口兼二、永井道雄両助教授らで協議の上進められたという。

旧制の京都帝国大学の文学部哲学科教育学専攻から大きく新制の教育学部開設に当っては、従来通り教育学関連の研究者養成という目的と同時に、教育学を学んだ者が社会各方面へ進出することをも促す狙いもあった。一九五三年からわが国でも新しいマス・メディアとしてＮＨＫ・民放併存によるテレビ事業が発足し、新聞社の再編を含めてマス・コミュニケーション状況の新時代を迎えていた。

特に教育社会学専攻領域では、そうした状況に対応して、教育も宣伝も何をどう教えこむかという問題である。教育は学校教育の問題にとどまらず、広く社会教育の観点で、マス・コミュニケーションも含めて考えてゆく必要があると留意されてきた。また一方、当時、ＮＨＫでも民放でも教育テレビ局が新発足し、その方面への京大教育学部卒業生の就職も増大したという現実的な事情もあった。

一九五五・六年度もそれ以降も講義題目の基本構成に大きな変わりはなく、たとえば、重松教授「教育社会学概論」「近代社会と教育」「Litt, Th.: Individuum und Gemeinschaft」、永井助教授「集団と人間形成」「行動科学の問題点」「Parsons, T.: Sociological Essays」「Liesman, D.: The Lonely Crowd」、森口助教授「社会過程における自我形成の諸問題」「社会教育の諸問題」「Linton, R.: Cultural Background of Personality」、小倉親雄助教授「図書館学概論」「図書館史の諸問題・書誌学と書誌」などである。

このうち、森口助教授は五五年の演習ではＲ・リン

トンの「パーソナリティの文化的背景」をとりあげ文化とコミュニケーションとの問題を検討し、五六年の「社会教育の諸問題」ではその一環として「娯楽は余暇のたのしみや慰め」のことであるとして、最近の映画、流行歌、大衆小説などのメディアでの表現内容にも分け入って講義を展開された。私の受講体験では、とりわけ娯楽の社会的文化的条件をその社会の生活史と関連づけて考察された点で、いわば娯楽のメディア史研究としても強く記憶に残っている[2]。

この領域研究の戦後日本における先駆的研究の事例といえば、たとえば、思想の科学研究会編『夢とおもかげ―大衆娯楽の研究』（中央公論社、一九五〇年）や鶴見俊輔『大衆芸術』（河出新書、一九五四年）をはじめとする思想の科学研究会による豊富な研究成果があることは良く知られている。

しかし、一九五六年度から二年間とはいえ、国立大学の正式科目として娯楽メディア史研究が開講されていた事実は、意外と珍しい事実ではなかろうか。その点で、森口兼二先生の「社会教育の諸問題（娯楽メディア史研究も含む）」はメディア史研究そのものではないが、貴重な関連先行研究のひとつといえよう。

なお、一九五六年度の社会教育学研究として、山本教授（文学部英文学科）の「演劇論」、清水（光繁）講師（映画監督）の「映画教育」が開講されており、教育心理学部門では芋阪良二助教授の「研究・視聴覚教育と情報論」、稲葉講師（ＮＨＫ）「放送概論」が開講されたが、これらはいずれもメディア史研究の広義の関連科目とみなされうる面もあるように思う。

一九五七年、加藤講師「マス・コミュニケーションの理論」開講

一九五六年度から五七年度にかけて、教育社会学部門の科目は、教育社会学、社会教育学、図書館学の三分野に分けて配置されるようになり、広義のメディア史研究科目群はいずれも社会教育学の分野に配置された。

一九五七年度からの新たな大きな変化は、京大人文科学研究所員の加藤秀俊先生が学内講師として新設の開講科目「広報学―マス・コミュニケーションの理論」を担当されることになった出来事である。主任教授の重松先生のお話では、はじめ「コミュニケーション論」という題目で開講を申請した所、当時の文部省担当者はカタカナ名は困る、漢字の「広報学」とするよう指示されたという。今では考えられない変な話だが、結局「広報学―マス・コミュニケーションの理論」となったらしい。

その年、私は大学院に入学したばかりだったが、加藤先生の講義の最初の受講生のひとりとして喜んで毎回出席させていただいた。

受講生（少なくとも当時の私）にとっては、コミュニケイションとは「ひとつの心が他の心に影響をあたえる手続きのすべて」（シャノン・ウィーバー）と定義されることや人間コミュニケイションの基礎として知覚と表現の三段階の―とりわけ非言語的コミュニケイションの問題の重要性を講義中に既にふれられ、強調されていた―ことなどいずれも新鮮な知見だった。

研究「マス・コミュニケーションの理論」は、私が受講した年は初年度のこともあってコミュニケイションやメディアの基礎論、さらにメディアの現況分析から始まったが、今振り返って見ると、メディアの社会史といい、マス・メディアと個人や社会の問題といい、大衆芸術・娯楽の成立などなどその後のメディア史研究の原型ともなり、基本課題の多くに言及され、考察されていた。

講義の理解を深める参考文献のひとつとして、その年刊行された加藤秀俊『マス・コミュニケイション』（大日本雄弁会講談社、一九五七年）を私は熟読し、また、先生のご論文「新聞と意味論」（『思想』昭和三一年五月）、「ある家族のコミュニケイション生活」（『思想』昭和三二年二月）や永井道雄・加藤秀俊「社会心理学研究の動向」（『思想』昭和三二年七月）なども拝読しつつ学習に備えた。

加藤秀俊先生の「マス・コミュニケーションの理論」は、先生がその後、一九六九年一月より、人文科学研究所から教育学部助教授（比較教育学講座）へ学内配置換えされるまで開講されたが、一九五七年度には他にもメディア関連科目には次のようなテーマが並んだ。

ひとつは、前年の五六年度から開講された清水（光繁）講師による「映画教育」である。清水講師は映画監督の立場から映画メディアの歴史やとりわけ、教育映画製作の現状とその問題点について実作者の経験を踏まえて講義を展開された。当時の映画は戦後急速な発展をみせ、テレビ出現までいわば大衆娯楽の王座を誇ってきた。たとえば、映画観客動員数でみると一九五七年は十億九千九百万人を記録した。翌五八年には十一億二千七百万人という最高観客数を記録するが、以後急速に減少し、とくにテレビの普及率が三十％をこえた六一年以降は、映画観客数の減少は著しい[3]。

そのころ、私自身も映画ファンを自任し、友人らと教育学部内に「京大大衆映画研究グループ」を結成し、毎週、京都御所近くの場末の映画館へ通い、三本立ての日本映画等を観続けた。その関心からも「映画教育」論は興味深い開講科目であり、その後五十九年まで開講された。

一九五七年にのみ開講された住谷申一同志社大教授（文学部新聞学専攻）の「新聞学」も受講したが、新聞学の面白さを実感させる講義として記憶に新しい。住谷申一先生の「新聞学」では、従来の正統的な言論新聞紙（大新聞）の歴史ばかりでなく、むしろ娯楽雑報紙である小新聞の流れに注目し、それも関西に根づいた小新聞群（なかでも京都における滑稽新聞や小新聞）の実物を提示し、それら未開拓な小新聞史研究の重要性を力説された。

当時、京大経済学部では、全学開講科目として、小野秀雄「新聞学原論」が開かれていたが、原論の内容は私の受講の記憶では、主に言論メディアとしての新聞史概説であったと思う。

それとは対照的に、住谷先生の「新聞学」は、それ

まで余り顧みられることの少なかった滑稽新聞や小新聞群の興味本位性、大衆性や「その日その日性」を分析することでジャーナリズムの本質に迫った講義であった。

住谷先生の講義で知った事実のひとつは、京大経済学部図書室内に貴重な「上野文庫」が存在するということだった。「上野文庫」には朝日新聞社の上野家によって収集保管された膨大な内外の新聞・雑誌やその関連の研究文献類が収納されており、いわば新聞メディア史資料の宝庫のひとつである。私自身もその後の研究過程で「上野文庫」には大変お世話になったことを感謝したい。

そのほか、一九五七年度には、藤原恵講師（朝日新聞）・平井講師（毎日新聞）による「新聞学実習」並びに牧講師（ＮＨＫ）「放送概論」はその後ＮＨＫの島浦講師、横尾講師へと引き継がれた。

一九六〇年代のメディア史研究の概況

一九六〇年度には、教育学部では、森口助教授「マス・コミュニケーションと教育」と加藤秀俊講師の「マス・コミュニケーションの理論」が開講されている。加藤先生はその後一九六九年一月に京大教育学部比較教育学講座助教授として学内配置換えされたので「マス・コミュニケーションの理論」はその年まで開講された。その頃京大紛争はドロ沼化し、加藤先生もその紛争に直面し、結局、翌年の一九七〇年冬に京大を「中年退職」[4]された。

六十年代の関西における主要大学での日本新聞学会加入メンバーの大要は次の通りである。同志社大学文学部新聞学専攻と関西大学文学部新聞学科の歴史が古く、同志社大学の教授陣は、和田洋一、住谷甲一、鶴見俊輔、城戸又一、山本明、北村日出夫、山口功二（以下も順不同）、などであり、関西大学は、中井駿二、金戸嘉七、薄田桂、吉田民人、田宮武、妹尾剛光、らの教授陣の名がみえる。関西学院大学社会学部では、藤原恵、塩原勉、津金澤聰廣の三名であった[5]。

右の教授陣の中でも、当時すでに理論社会学者として注目されていた関西大学の吉田民人氏並びに関西学院大学の塩原勉氏が共にマス・コミュニケーション論の講義も担当されていたことは特筆に価しよう。

それから、これは偶然、私の書庫に眠っていたコピーによるものだが、一九六九年四月に第一回「メディア史研究会」を同志社大学社会学科研究室で開催している。そのメモ書き風のコピー（図1）によれば、報告者は鶴見俊輔先生でテーマは「Cirlot "Dictionary of Symbol"をめぐって」である。研究会の今後については、三月下旬に相談会を開き、（出席者は、鶴見俊輔、多田道太郎、山本明、北村日出夫、津金澤聰廣、渡辺武達、岩田静治）次の事項が話し合われた。

一、この会はレポートを中心の雑談の会にしよう。

一、月一回が原則だが、無理に強行しない。テーマは無限にある。たとえば、

―旅日記の研究、ヨーロッパ大衆小説の中でのメディア史、漫遊記、山伏、文具の歴史、書体の美学、など。

・五月例会の報告書は多田道太郎、テーマは「モンテーニュの旅日記」（随想録ではない）

この「メディア史研究会」の発案は、私の記憶によれば、たしか鶴見俊輔先生が山本明、多田道太郎両氏と相談され、呼びかけ人となり発足した。事務局は山本明氏が担当され、電話で入会を呼びかけると、何人かが「なに、メリヤス研究会だって」と聞き返されたというので、本会のニックネームは「メリヤス（莫大小）研究会」とした。

当初の会員は、右相談会の七名のほかに、加藤秀俊、井上俊、小松実（左京）、山田宗睦、片桐ユズル、（おさそいしている方）品川清治、深作光貞と記録されている。

この「メディア史研究会報」は第一号しかみつからないので、その後の動向については、記憶も不確かである。だが、その研究会の五年前の一九六四年、六月発行の、これもメモ書き風の「メディア史研究会ニュース」（合資会社メディア史研究会発行）のコピーもみ

つかった（図2）。そのコピーによれば、この第一回相談会は同志社大学の山本明研究室で開催され、出席者は、鶴見俊輔、多田道太郎、塩原勉、津金澤聰廣、山口功二、山本明、であった。

決定事項には次のような記述がある。

（1）本研究は世界メディア史的視野をもつが、さしあたりの研究対象としては、日本メディア史からはじめる。

（2）日本メディア史は、江戸時代を核におき、江戸→現代日本への展開でヨーロッパ・アメリカのメディア史にふれ、次に江戸→日本古代への展開で中国との接触・中国→ヨーロッパのメディア史にふれる。

（3）カードシステム（パンチカード）を採用し、カードは共有とする。会員のカード利用は自由とする。

（4）資本金として一人1，000円を拠出する。今後必要に応じて拠出する。

研究計画は壮大といえようが、当面の〈参考文献の分担〉は次の通りである。

鶴見俊輔＝講座日本歴史・古代、池田彌三郎、折口信夫、明治事物起源、嬉遊笑覧

多田道太郎＝風俗史講座、林屋辰三郎「中世芸能史研究」

塩原　勉＝日本の民族、講座日本歴史・中世

津金澤聰廣＝日本庶民生活史

山口功二＝内藤湖南

山本　明＝日本語の歴史、講座日本歴史・中世

この「メディア史研究会ニュース」も第一号しかみつかっていないので、この研究会の詳細やその五年後に発足するほぼ同メンバーによる「メディア史研究会」との関係は残念ながら不明である。ただ、私の乏しい記憶によれば、六十四年の会は、計画が予定通り進まぬままに、六十九年になって再び相談の上、研究会を再発足したように思う。

これら「研究会」の動向は、今日の時点で振り返ってみると、その後一九七六年九月に桑原武夫先生を会

○　なお本会のニックネームは「メリヤス（莫大小）研究会」。（電話で何人かが「なに，メリヤス研究会だって」と言ったので）。

○　現会員　12名

鶴見俊輔
多田道太郎
加藤秀俊
津金沢聡広
井上　俊
北村日出夫
小松　実（広京）
岩田　静治
渡辺　武達
山田宗睦
片桐ユズル
山本　明

○　現在おさそいしている方

品川清治
深作光貞

―――――――――――― x ――――――――――――

会へのご連絡は下記へ．

山本　明　Tel.　自宅 075－791－8085
学校 075－211－2311 内線 334 335

図１　メディア史研究会報・第一号

メディア史研会報

NO. 1
1969.4

第1回研究会ご案内

とき　4月24日(木)　午後6時
ところ　同志社大学社会学科研究室(34風館4階)

報告者　鶴見俊輔
Cirlot, "Dictionary of Symbol" をめぐって.

出席の可否を同封のハガキでお知せ下さい。
当日は夕食をとりながらの会です。夕食代約300円.

3月相談会報告

3月28日に会の今後について相談会をひらきました。
出席者は、鶴見、多田、北村、津金沢、渡辺、岩田、山本
そこで話し合われたことは下記のごとし

- この会はレポートを中心の雑談の会にしよう。
- 月1回が原則だが、無理なときは強行せず休む.
- 来る者はこばまず、去る者は追わず方式
- テーマは無限にある。たとえば
  - 旅日記の研究
  - ヨーロッパ大衆小説の中でのメディア史
  - 漫遊記
  - 山伏
  - 文具の歴史
  - 書体の美学　など ——
- 5月例会の報告者は多田道太郎、テーマは「モンテーニュの旅日記」(隠想録ではない)

★参考文献の分担★

鶴見俊輔	講座日本史・古代
	池田弥三郎
	折口信夫・明治事物起源
	蝶遊笑覧
多田道太郎	風俗史講座
	~~日本庶民生活史~~
	林屋辰三郎「中世芸能史研究
塩原勉	日本の民族
	講座日本史・中世
津金沢聡広	日本庶民生活史
山口功二	内藤湖南
山本明	日本語の歴史
	講座日本史・中世

図2　メディア史研究会ニュース・第一号

(1)　　—不許複製—　合資会社メディア史研究会発行

メディア史研究会ニュース

NO.1　1964.6

第一回相談会

1964年6月18日

於　同志社大・山本研究室

出席者；　鶴見俊輔・多田道太郎・塩原勉
津金沢聡広・山口カヨ・山本明

決定事項

1)　本研究は世界メディア史的視野をもつが、さしあたりの研究対象としては日本のメディア史からはじめる。

2)　日本メディア史は、江戸時代を核におき、江戸→現代日本への展開でヨーロッパ・アメリカのメディア史にふれ、次に江戸→日本古代への展開で中国との接触・中国→ヨーロッパのメディア史にふれる

3)　カードシステム（パンチカード）を採用し、カードは共有とする。会員のカード利用は自由とする。

4)　資本金として一人1000円を拠出する。今後必要に応じて拠出する。

長に結成され、発足した「現代風俗研究会」とは水脈としては深くつながっていたように思われる[6]。

一九七〇年以降について

京大教育学部における「広報学」講義は、一九七〇年度から、当時の主任教授姫岡勤先生より加藤先生の後任として指名された津金澤講師（非常勤）が担当することとなった。

講義概要では、「広報学概論―マス・コミュニケーションの過程・効果・社会的機能について概論を行なう」とある。はじめの数年間は、その頃次々と刊行された加藤先生の新著、たとえば「明治二十年代ナショナリズムとコミュニケイション」（坂田吉雄編『明治前半期のナショナリズム』未来社、一九五八年）、『眼と耳の世界』（朝日新聞社、一九六二年）、『見世物からテレビへ』（岩波新書、一九六五年）、から『文化とコミュニケーション』（思索社、一九七一年）に至るまでの諸文献を教材の軸に据えて講義を組み立てた[7]。

そして、マス・メディアの現状と問題点の分析には、その当時のコミュニケーションの二段の流れ論仮説や「技術革新の普及過程」、あるいはマス・コミュニケーションの効果と「利用と満足」研究などの成果を引用しつつ説明を試みた。

一九七三年度は、たまたま津金澤は本務校から英・独への短期外地研修へ派遣されたので、代わりに山本明同志社大助教授に「広報学講義」を、荒木功京大教育学部助手に「広報学講読演習」を代わって担当していただいた。

山本講師の「広報学」の概要は「マス・コミュニケーション論の基礎原理としてのコミュニケーション論からはじめ、記号論、認識論にもふれる。つぎに、マス・コミュニケーションの構造、とくにその日本的特質をのべながら、そのイデオロギー性を明らかにする。（テキストとして日高六郎他編『マス・コミュニケーション入門』（有斐閣、一九六七年）を使用する、とある。

荒木講師の「講読演習」は「英文献講読―『コミュニケーション』に関する文献を講読し、広報学の基礎理論的諸側面を検討する」と記されている。

一九七四年度から一九九一年三月までと、一九九三年四月から一九九七年三月までは津金澤講師が「広報学」を担当した。一九七〇年四月から通算すると、合計二十四年間担当させていただいたことになる。

一九七七年度からは、前期は「広報学概論」とし後期は課題演習「マス・コミュニケーションに関する主要な研究業績を中心に演習を行なう」として、各年度ごとに参考文献リストを作成、提示し、その中から各受講生が分担する研究報告を軸に演習を行った。

その教材文献には、『思想』所載の諸論文、たとえば荒瀬豊「新聞独占の形成過程」（第三六八号）、日高六郎「労働者とマス・コミュニケーションとの結びつき」（第三七〇号）、加藤秀俊「ある家族のコミュニケイション生活」（第三九二号）、鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケイション論」（第二九七号）、荒瀬豊「日本軍国主義とマス・メディア」（第三九九号）、香内三郎「マス・メディアとイデオロギー」（第四〇三号）、加藤秀俊「大衆文化研究の動向」（四〇八号）、多田道太郎「読者の問題」（四〇九号）、高橋徹「テレビジョンと政治」、加藤秀俊「テレビジョンと娯楽」、南博「テレビジョンと受け手の生活」、稲葉三千男「テレビジョン・広告・大衆」、林進「テレビジョンの歴史」、戒能通孝「言論の自由とテレビジョン」、島田厚「テレビ芸術の基礎」（以上、第四三一号）、南博「娯楽の肯定と娯楽の否定」、佐藤毅「最近の大衆娯楽・余暇の研究」、佐藤忠男「戦後日本映画のヒーローたち」（以上四三一号）、加藤秀俊「非言語的コミュニケイションの問題」（四四九号）、「交通・通信網の発達―世界における同時性」（六二四号）、等々であった[8]。

これらの諸研究に学びつつ、「広報学概論」や「課題演習」を進めたが、加えて、私自身一九六五・六年からメディア史研究を目標に勉強を始めた〝小新聞〟研究や漫画や映画など大衆文化メディア史、あるいは放

送メディア史、広告史研究など、拙論の公刊文献もわずかながら補足して講義に備えた。

以上が一九九〇年代までの概要だが、あくまで小論はごく私的な覚え書き報告であるに過ぎない。

---

(1) 木下浩一氏の調査によれば、『京都大学研究科紀要』の巻末に一九七三年度までは、その年度の講義題目名が記載されていた。従って小論では、一九五五年度から一九七二年度の講義題目はそれらを参照し、引用した。

(2) 森口兼二「娯楽」、川島武宜『人間と社会』中山書店、一九五六年。

(3) 津金澤聰廣「マス・メディア産業の現状・映画・出版」（日高六郎、佐藤毅、稲葉三千男編『マス・コミュニケーション入門』（有斐閣双書、一九六七年、所収。

(4) 加藤秀俊『わが師わが友―ある同時代史』中央公論社、一九八二年。

(5) 日本新聞学会編『資料・日本新聞学会の三十年』一九八一年。

(6) 現代風俗研究会（〝現風研〟）設立の水脈としては、ここでふれた「メディア史研究会」のメンバーと、一九六七年発足の現代娯楽研究会（その前身はテレビ番組史研究会）の仲村祥一、池井望、小関三平、井上俊、内田明宏、井上宏、田宮武、津金澤聰廣らとの合流によって当初の会運営は始まったという経緯がある。その合流の媒介役のひとつは、井上俊、山本明、小関三平、津金澤聰廣らであった。

(7) 津金澤聰廣「加藤秀俊先生に学んだ日々」『アリーナ』第十二号、（中部大学、二〇一一年一一月発行）。

(8) 『思想』一九六六年三月号（五〇一号）『思想』総目次―創刊号―五〇〇号）参照。